

教職の授業で、「新聞に〇〇県でまた体罰の処分が報じられていますが、学校教育法第11条のただし書きにいう体罰は、いかなる場合においても行ったら駄目です。え～・・・」と講釈し、次に、学生達の意見を聞くと、「私の学校ではありましたよ。」とか「この程度は体罰と違うのと違いますか?」「いや、やっぱりあかんやろ」と様々に反応が返ってきます。

とりあえず「児童・生徒が肉体的苦痛を感じる行為は駄目で・・・」と整理した後で、今は亡き名優の森繁久彌氏が母校、北野高校の創立120年に寄せられたCDを聞いてもらい感想を書いてもらいました。

拙文をお読みいただいている皆さまには、森繁氏の節回しをお届けできないのは残念なところですが、起こすと次の詩となります。

忘れがたき北野中学

八十年も生きてなお我が心の底にかそかにやどる思い出は中学生のころ。

その母校が120年の歴史を数える。

忘れられない友も大半が逝き、年をとればいかにもわびしい毎日だが、

そんな中できらりと光る青春のかんばせとでも言おうか、

私はその得難い追憶に老いの身を忘れる

どうゆうものだろう、叱った先生ばかりがなつかしい。

ぶっ飛ばされて鼻血を出しながら、私は、

いずれ卒業の時に仕返しをしてやろうと、ひそかに鼻血を拭いたが

それもこれもどこかに吹っ飛んで、ただなつかしさだけが残る。

叱らなかった先生はほとんど覚えていない。

叱った先生は克明に覚えている。

西陽の差す教室に一人残されて、私は、

ついに泣いて、両手をついて先生に謝った。

顔を上げれば涙でうるんだ目に

先生も泣いているのを見た。

西陽も落ちて教員室で先生のごちそうしてくれた素うどんが、

また、涙が出るほどうまかった。

爾来、私はうどん屋でも素うどん以外は食べなかった。

そのうどんの残りつゆの上に先生の顔が浮いていた。

あ～、その先生方もほとんどが黄泉の国へ旅立たれた。

なつかしくも涙のうるむ母校、北野中学

学生達の感想をいくつかピックアップしてみます。

○私が先生になった時には、きちんとダメなことはダメ、良いことは良いとはっきりメリハリをつけ、他人の意見や自分の地位のために流される教員ではなく、きちんとした教育ができる先生になりたい。

○叱った先生を覚えているのは、その先生の愛情が生徒に伝わったからだろう。優しいだけが愛情ではない。しかし、現代で同じような教育をしたくても出来ないのが現実だろう。教師は一本筋が通っていないとダメだと感じた。

○時代を感じた。暴力が良いわけではないが、きっちり叱ってくれる先生って良いなと思った。ただ叱って終わりではなく、きちんと見放さず接してくれたからこそ、いつまでも記憶に残っているのだと思う。

○思いをこめて指導すれば生徒に伝わる。ただ厳しくすることが良いわけではない。生徒の心に響くような指導ができる教師になりたいと思う。

○きちんと叱ることは、生徒をよく見て注意し、また生徒を正しい方向へ導くことにつながり、本当は今の時代の私たちにとって一番必要なものなのかもしれない。

今の学生たちも、事柄の現象面にとらわれることなく、本質的なものを理解・把握してくれていることに安堵した一時間でした。

お読みいただいた方はどのような感想を抱かれたでしょうか？